

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 8 日現在

機関番号：13601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2014

課題番号：25590283

研究課題名(和文) 特別支援学校(聾学校)の「話し合い」活動の基本技術に関する研究

研究課題名(英文) Study on the Basic Technology of the "Speech-Communication" Activities of School for the Deaf

研究代表者

庄司 和史 (SHOJI, Masashi)

信州大学・学術研究院総合人間科学系・教授

研究者番号：20528640

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：聴覚障害幼児の言語指導法である口声模倣に焦点を当て研究を進めた。教師が示す言葉のモデルを模倣によって学習する口声模倣は、子供の言語発達に応じて意図的に行われており、これは直接には表出にかかわる練習場面であるが、内容理解にも関連が深いこと、対象となる言葉は、授業展開や子供の非言語表現から必然性の高いものが選択されていることが確認された。教師は、視覚的手がかりを駆使して指導に当たっていること、口声模倣場面の中では言葉の意味の確認作業が頻繁に行われることが明らかになり、口声模倣という方法が、聴覚障害幼児の日本語習得に有効な手法であることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：This study is about the mouth voice imitation in education of auditory difficulties. It was analyzed about a way of speech imitation from an actual situation. In the speech imitation, first, a teacher shows a model. And a child imitates that. The teacher who guides catches the reality of the child's language development, intends and is doing the speech imitation. And the speech imitation is immediately concerned with linguistic expression, but indirectness is also concerned with language understanding. Something with the high inevitability is chosen by child's life and behavior for a target word. A teacher uses a visual hold much, and the meaning of the word is being confirmed repeatedly during guidance. The thing by which the speech imitation is an effective method in hearing-impaired child's Japanese acquisition was suggested.

研究分野：特別支援教育

キーワード：口声模倣 言語指導 話し合い活動 発音指導 聴覚障害 音声言語 聾学校 聴覚活用

## 1. 研究開始当初の背景

平成 12 年に開始された新生児聴覚スクリーニングは、急速に普及し(三科,2007; 庄司・齋藤・松本・原田,2011)、聴覚障害の早期発見が進み、聴覚障害を主領域とする特別支援学校(聾学校)の乳幼児教育相談部門においては、新たな課題が発生している(庄司・四日市,2006)。また医学や電子工学の発展によって高度難聴の乳児にも適応できる小型で高性能補聴器や人工内耳の開発が進んでおり、重度難聴の乳幼児段階での人工内耳適応率は 50%であることも報告されている(テクノイド協会,2012)。しかし、こうした新生児聴覚スクリーニングの普及や早期の人工内耳適応がどのような効果をもたらしているかについては、必ずしも明確ではなく、聴覚障害児の言語発達には遅れが見られ(テクノイド協会,2012)、早期療育の成果についても「エビデンスが乏しい」(廣田,2013)とされる。

一方、聾学校においては、人事異動等によって専門的指導技術の継承や発展が課題となっている(庄司,2013)。聴覚障害児の日本語の習得の問題は、普遍的な課題であると考えられ、とくに「学習言語」(齋藤,1983)の段階への言語力のレベルアップ、日本語の読み書きの力をつけるという問題は、常に直面し続けている課題であると言える。

こうした聴覚障害教育における言語指導は、従来から重要な課題となっており、幼稚園の「話し合い」活動は言語指導の重要な活動であることが知られているが、近年、この活動における基本指導技術をまとめて示されているものはない。

## 2. 研究の目的

指導案、録画資料等「話し合い活動」の実践資料の分析を通して口声模倣等言語指導の基本的指導技術を明らかにする。

## 3. 研究の方法

### (1)先行文献等の検討

主として以下の先行文献から、本研究の中心となる「口声模倣」の定義、および前提となる条件についてまとめた。

今井柳三(1954): 発語発音指導体系・愛知県立名古屋聾学校(1981年に湘南出版社より復刻版)

岡辰夫(1981): 発音・発語指導・聴覚障害幼児指導の基本と実際,第4章,宮野忠夫編,聾教育研究会

大塚明敏(1977): 言語指導・聴覚障害教育の実際,東京教育大学国府台分校編,聾教育研究会

札幌聾学校(1985): 「朝の話し合い」活動の実践(その3)~いわゆる「おさえ」について~. 北海道札幌聾学校

### (2)指導場面の収集 実践校訪問

「話し合い活動」の実践校 2 校に授業参観依頼を行い訪問した。授業参観時には手書きメモによって場面を記録した。なお、2 校中 3 学級については学校および保護者の承諾を得て一部の場面について録画を行った。

### 研究代表者自身の授業記録

20 余年の実践経験のある研究代表者の授業記録(録画を含む)から対象となる口声模倣等の指導場面を抽出した。

### その他

その他、校内研修、各種公開研究会等で学校参観する機会に、口声模倣場面を手書きメモによって記録を行った。

### (3)指導場面展開例の分析・検討

上記で収集した場面から、3 歳児 11 場面、4 歳児 11 場面、5 歳児 13 場面、3~5 歳児合同 1 場面を選択し、分析対象場面とした。各場面について、言葉の選択、教師の意図、口声模倣の手法、の 3 課題について検討を行った。

### (4)倫理審査

研究にあたっては、信州大学の規定に基づき、信州大学ヒトを対象とした研究に関する倫理審査委員会の審査によって承認を受けて実施した。

## 4. 研究成果

### (1)口声模倣の定義

口声模倣は、大塚(1977)は、「言語記号獲得の手段として実施される」(大塚,1977)もので、「聴覚障害幼児が言葉を獲得するための不可欠な手段」(札幌聾学校,1985)である。そのねらいは、「a)子供の理解の程度を知る、b)正しい表現を知らせる、c)話の中で発音の意識を育てる、d)声の大小を知らせる、e)新しい表現を練習する等々」(札幌聾学校,1985)とされる。また、口声模倣場面については、「意味が存在する場面」(大塚,1977)であることが重要で、「気持ちをこめた或いは生活の実感をこめた」口声模倣(札幌聾学校,1985)が行われるために、子供の気持ちの動きや興味・関心が中心に扱われる場面で行われることの重要であるとさせる。このことから、「話し合い」活動での口声模倣が重要であることが示唆されている。

指導技術については、「一旦耳や目を使って受容させた言葉を更に耳で大きく感じや目で捉えた口や舌の動きにしたがってその通りに口まねを何回もさせ、自分の唇や舌、喉等の筋肉の動きの感じとか、自分の出す言葉によって残存聴力をゆさぶる感じ等に訴えて、言葉の記号の取り込みをさせる」(大塚,1977)もので、これは、「聴覚に拠らないで聴覚障害児に言葉を学習させる方法」であり、この「受容感覚は視覚であり、表出には筋肉運動知覚に拠っている」。このように「受

容と表出では感覚が異なって」いることから「不整合の問題が生じる」とし、指導する側に「いくつかの知識や技能が必要となる」（岡,1981）と言われる。

### (2) 口声模倣による指導の前提

学習の主体を子どもとし、子どもの人権を尊重する意識を教師自身もつこと  
 子どもとの信頼関係を構築していくこと  
 聴覚、視覚、触覚など子どものあらゆる感覚が快く最大限に活用されていること  
 生活全般において因果関係を大事にした生活が保障されること  
 言語発達が未熟な段階でも様々な方法を駆使して意思の疎通が行われていること  
 言語の発達は子どもの全体発達との関連も深いことを踏まえ、言語指導が遊びを中心とした活動の中で行われていること。

### (3) 指導場面の分析

#### 場面について

「話し合い」活動の実践校 2 校について、合計 6 回の訪問を行った（A 校：平成 25 年 9 月 9～10 日、平成 26 年 2 月 25 日、平成 27 年 2 月 24 日、B 校：平成 25 年 11 月 19 日、平成 26 年 4 月 24 日、平成 26 年 11 月 20 日）。また、上記 2 校以外の参観機会を活用し、指導場面を記録、さらに、研究代表者自身の授業記録（録画を含む）から対象となる口声模倣場面を加え、合計 36 場面を分析対象場面とした。場面の内訳は、3 歳児 11 場面、4 歳児 11 場面、5 歳児 13 場面、3～5 歳児合同 1 場面、幼児 2 名以上のグループ指導場面は 30 場面、残り 6 場面は個別指導場面であった。

#### 課題 1：言葉の選択

各場面での口声模倣の対象となる言葉の選択については、大きく、教師が子供の表現を適切な言葉に置き換えたものと、提示した物や行動を言語化したものなどその場面に必然的に必要なものがあつた。前者は、身振りや指差し等の非言語表現を言語化したものと子供が単語や単文で発語したものを教師が拡充模倣し複文形式にして模倣させたものがあつた。言葉の選択については、教師の指導意図との関連が深い。また、前時の扱いや個々の経験、季節や行事の関係、そして個々の子供の興味や関心の傾向などの要素も含めて、授業を行う教師がその場で判断して言葉が選択された。

#### 課題 2：教師の指導意図

教師の指導意図では、74 の意図が確認され、これらを以下の A～F の 6 つの意図に分類した。各意図の内容を表 1 に、分類結果を表 2 に示す。

まず、これらの意図を上を示した A から F の 6 通りの意図に分類した。分類結果を表 1 および図 1 に示す。グループ指導場面や異なる言葉が連続して指導の対象となる場合があるため、1 場面で複数の意図が確認された。全体としては、A がもっとも多く見られた。学年別では、B は 5 歳児から、C は 4 歳児から増えていた。D、E は比較的少なかったが、D は各学年で平均的に見られ、E は 3 歳児で多く見られた。F は、子どもの気持ちや考えを揺り動かし、様々に言葉かけしながら対象となる言葉を探っている場面が分類された。

表 1 教師の指導意図の内容

意図	内容
A	正確に言わせる（音節数、発音、リズムなど）
B	新しい単語や文形式を意識させる（言葉を意識させることが目的で模倣の正確性はそれほど高く求めない）
C	より長い文章で言わせる（単語をつないで多語文で言わせたり、教師が拡充模倣した文を模倣させたりする）
D	受容の状態を確認する（言葉が読話や聴覚活用によってとらえているかどうかを確認する）
E	口声模倣を習慣づける（教師の口元に着目し真似ようという習慣をつける）
F	その他（上記に含まれない内容）

表 2 対象場面における教師の指導意図の分類結果

指導意図	3 歳児	4 歳児	5 歳児 (含合同)	合計
A	9	10	6	25
B	1	2	8	11
C	3	7	6	16
D	4	4	3	11
E	4	1	0	5
F	3	1	2	6

教師の指導は、すべて意図的に行われている。口声模倣等の直接的な言葉の練習場面だけでなく、保育活動のあらゆる指導に教師の意図があり、意味がある。言語指導にかかわっても、子供の表現を聞くとき、子供の不十分な表現を言葉に置き換えて話しかけると、あるいは、発言している他の子供への注目を誘うとき等々、様々な意図の中で授業が展開されていく。今回の結果は、そのうちの「口声模倣の意図」だけを取り出しているものであることを踏まえる必要がある。つまり、ここで示している意図とは、様々な実態のある個々の子供に対しての表面的な意図に過ぎないとも言える。つまり「正確に言う」という意図の背景にもまた指導の意図があるというように考えていくことは前提にある。その上で、このように分類することによ

て明確になったのは、発達段階によって指導の意図は異なっているということである。とくに新出語彙や新しい表現形式での口声模倣は学年が上がるにつれて多くなる。また、最初は音節数の少ない単語や短文が対象となることが多いのが、徐々に拡充模倣された文形式の模倣が多くなることも特徴的である。さらに、「発音・発語」という表出の練習として行われる口声模倣が、一方で、受容状態を模倣させることによって確認するという意図で行われる場面の多いことが分かった。

### 課題3：口声模倣の手法

口声模倣の手法では、大きく、次の5つの手法が見られた(表3)。

表3 口声模倣の手法

手法	教師の口の一つ一つの動きに合わせて一緒に言わせる。
手法	教師の言った後に同じように言わせる。
手法	教師が言葉の最初の部分だけを言い、後を続けさせる。
手法	視覚的な手がかり(発音サイン、口形文字、絵、文字、教師の指など)を示しながら言わせる。
手法	耳だけで聴かせて言わせる。

手法 は、とくに3歳児の言語が少ない前半の時期と4歳児の個別指導場面に見られた。手法 は3歳児の後半からすでに日本語の自発語があると思われる子供に対して行われていた。手法、手法 は各段階で見られた。手法 は一部の授業で発音の修正を目的に行われていた。

全体的に、場面や子供の実態によって様々な指導の手法が総合的に駆使されていた。例えば、一つの場面でも、C1児にはの方法を中心に、C2児にはとを組み合わせるというところが見られていた。また、の展開も、やにつながるように、子供の口の動きや声の出し方を見極めながら展開しているような場面があった。

また、の手法においても、子供の誤った表現を肯定的に受け止めた後に適切な言い方を示していたり、誤った表現に対して疑問を投げかけ自分で気づかせたりする方法を用いて口声模倣を展開する場面、繰り返してもなかなか達成できない子供に対して一旦他の子供に言わせてその様子を見せてから言わせ達成させるといった場面があった。

口声模倣の前後に言葉の意味内容を確認するための指導が頻繁に見られ、例えば、指差しをさせる、動作や身振りをやらせる、発音サイン(キューサイン)を使用させる、文字を書かせるといった方法がとられていた。

### (4)まとめ

分析対象場面の一部については、具体的に言葉の選択、教師の意図、手法について検討を行い、解説を加えた(図1に例示)。

これらの検討から、口声模倣は、子供の言語発達の実態に応じて意図的に行われていること、また、対象となる言葉の選択という側面からは、授業展開で必要言葉、子供の非言語の表現を言語化したもの、単語表現を文表現に拡充したものなど、授業の展開や子供の表現上必然性が高いものが選択され、選択された言葉については、授業の中で言葉の意味の確認が頻繁に行われていることが分かった。また、口声模倣は、発音指導との関連が深く、日本語の音韻の意識を高めることにつながるものであり、教師の専門的な指導力が必要な指導法と言える。一方、口声模倣は、内容理解、読話力といった受容面にも深く関わることが確認できた。理解面と表現面は、「一つのものの表裏二面に相当する関係」(今井,1954)であることが各場面の検討から確認できた。

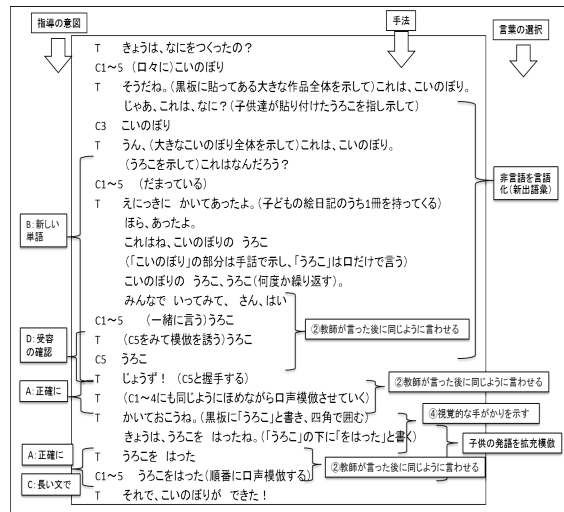


図1 展開例(4歳児1学期)

### 【図1の展開例に関する解説】

4歳児1学期。このぼり製作後の「話し合い」活動の一場面、幼児5名のグループ活動である。全体的な教師の指導意図としては、「このぼり」という言葉を確認しながら「うろこ」という「新しい語彙」のおさえを行おうというものである。展開の中で、すでに絵日記で扱っているということから、この一連のこのぼりの話題の中で「うろこ」という語彙の導入の扱いはすでに行われていることが窺える。したがって、この場面では、「うろこ」を「正確に言う」ことも比較的強く求めている。意図を細かく分類すると、「受容の確認」も行いつつ展開している。手法としては、口声模倣の中心となる、「教師が言った後に同じように言わせる」というものを中心に行っているが、「より長い文で言わせる」という意図では、板書を行い、「視覚的な手がかり」を示している。しかし、この時期の幼児たちは、ひらがな文字を読むことはまだ慣れていない場合が多い。あくまで

も意味付けし、幼児の意識に残すという意味合いが大きいとも言える。こうした板書を繰り返していくことによって、文字に対する興味や意識が高まり、やがて文字を手がかりに口声模倣を行うようになってくる。また、一斉に言わせるなど、幼児5名という集団をうまく活用している様子も見られる。4歳児の段階になると、「正確に言わせる」ということを頻繁に求める場面が多くなるとも言える。3歳児段階で育てた「しゃべり癖」がベースとなって、教師の要求に応じるといった態勢がしっかりできていると、こうした口声模倣場面が自然に展開できるようになってくる。

口声模倣は、単に音声言語の語彙を習得する方法として重要なだけでなく、日本語の基本的な体系を身につけることに有効な方法である。聴覚障害教育では、早期からの手話の導入や人工内耳の装用が進められており、聴覚障害幼児の言語情報の受容状況は大きく変化している。しかし、幼児期において周囲の言語情報の意味が伝わることは日本語の言語体系が育てられることとは同じではない。また、一次的な言葉の段階から論理的思考に関連する二次的な言葉の段階へ発達する上で、示された文モデルをそのまま模倣するという活動は有効であると考えられる。今後さらに資料を収集し、より多くの場面について検討を重ねることによって、平均的な口声模倣の手法がさらに明らかになると考えられる。

#### <引用文献>

三科潤、新生児聴覚スクリーニングの効率的実施および早期支援とその評価に関する研究、厚生労働科学研究費補助金子ども家庭総合研究事業（主任研究者：三科潤）平成16年度～18年度総合研究報告書、2007、1-10  
庄司和史・齋藤佐和・松本末男・原田公人、新生児聴覚スクリーニングの進展と聾学校における乳幼児支援体制の現状 - 乳幼児支援担当者に対する調査から -、特殊教育学研究、49(2)、2011、135-144  
庄司和史・四日市章、聴覚障害の早期発見に伴う0歳からの補聴器装用への教育的支援、特殊教育学研究、44(2)、2006、127-136  
テクノエイド協会、聴覚障害児の日本語言語発達のために～ALADJINのすすめ～、感覚器障害戦略研究聴覚障害児の療育等により言語能力等の発達を確保する手法の研究、2012  
廣田栄子、乳幼児難聴の聴覚医学的問題「早期診断と早期療育における問題点」、Audiology Japan 56、2013、199-211  
庄司和史、ろう教育の現状と今後、平成24年度論文資料集、信州大学庄司研究室、2013、1-35  
齋藤佐和、生活言語から学習言語へ、聴覚

障害、1983、聾教育研究会  
今井柳三、発語発音指導体系、愛知県立名古屋聾学校、1954（1981年に湘南出版社より復刻版）  
岡辰夫、発音・発語指導、聴覚障害幼児指導の基本と実際、第4章、宮野忠夫編、聾教育研究会、1981  
大塚明敏、言語指導、聴覚障害教育の実際、東京教育大学国府台分校編、聾教育研究会、1977  
札幌聾学校、「朝の話し合い」活動の実際（その3）～いわゆる「おさえ」について～、北海道札幌聾学校、1985

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

##### 〔雑誌論文〕（計 3件）

庄司和史、聴覚障害幼児に対する口声模倣について、教育オーディオロジー山梨学習会講座資料集、査読なし、信州大学庄司研究室、2015、99-111

庄司和史、難聴児の発語に関連する基礎的事柄 - 早期段階における聴覚活用の意義と因果関係理解を中心に -、教育オーディオロジー長野県学習会資料集、査読なし、信州大学庄司研究室、2014、115-133

庄司和史、聴覚障害のある幼児の言語指導場面における口声模倣について - 特別支援学校の授業実践から -、教職研究、査読有り、第6号、信州大学全学教育機構教職教育部、2013、33-44  
<http://kyoushoku.shinshu-u.ac.jp/kyoushoku/paper/no6/64.pdf>

##### 〔学会発表〕（計 3件）

庄司和史、聾学校幼稚部の「話し合い」活動における指導技術（その2） - 口声模倣場面の分析 -、日本特殊教育学会第52回大会（口頭発表）2014年9月22日、高知大学、高知市

庄司和史、言語指導、北海道教育オーディオロジー研究協議会講習会、2014年8月2日、北海道教育文化会館、札幌市

庄司和史、聾学校幼稚部の「話し合い」活動における指導技術（その1） - 口声模倣について -、日本特殊教育学会第51回大会（口頭発表）2013年8月31日、明星大学、東京都

##### 〔その他〕

学習会の後援  
名称：教育オーディオロジー山梨学習会  
主催：関東教育オーディオロジー研究協議

会

日時：平成 27 年 2 月 14 日～15 日  
会場：山梨県立青少年センター、甲府市  
内容：教育オーディオロジーの基本に関わ  
る講演および講習  
講師：白倉明美他 12 名

「教育オーディオロジー山梨学習会」講座  
資料集の編集および発行  
発行日：平成 27 年 2 月 14 日  
著者：白倉明美、川上綾子、木村淳子、原  
田公人、鈴木牧子、柏木雅章、松本  
末男、松森久美子、庄司美千代、中  
井弘征、今村俊一、庄司和史  
総頁：111

学習会の企画・開催（主催）  
名称：第 3 回教育オーディオロジー長野学  
習会  
日時：平成 26 年 6 月 21 日  
場所：信州大学松本キャンパス  
内容：難聴のある子どものための発語・発  
音指導  
講師：板橋安人（元筑波大学附属聴覚特別  
支援学校）、木村淳子（筑波大学附  
属聴覚特別支援学校）  
参加者：県内および隣県（山梨県）の現職  
教員等約 40 名

資料集「難聴児のための発音指導」の編集  
および発行  
発行日：平成 26 年 2 月 15 日  
著者：板橋安人、木村淳子、庄司和史  
総頁：133

学習会の企画・開催（主催）  
名称：第 2 回教育オーディオロジー長野学  
習会  
日時：平成 25 年 5 月 18 日  
場所：信州大学松本キャンパス  
内容：聴覚活用の意義と補聴器の役割  
講師：庄司和史  
参加者：県内および隣県（山梨県）の現職  
教員等約 30 名

学習会の企画・開催（主催）  
名称：第 1 回教育オーディオロジー長野学  
習会  
日時：平成 25 年 4 月 13 日  
場所：信州大学松本キャンパス  
内容：聴覚障害とは何か  
講師：庄司和史  
参加者：県内および隣県（山梨県）の現職  
教員等約 30 名

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

庄司 和史 (SHOJI, Masashi)

信州大学・学術研究院総合人間科学系・教  
授